

日本書紀「与」と「及」の用字法研究*

安 熙貞**

(e-mail : hjahn@uu.ac.kr)

<目 次>

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 「与」の用法 |
| 2. 連詞と介詞の区分 | 4.1. 連詞 |
| 3. 「与」の用法 | 4.2. 介詞 |
| 3.1. 連詞 | 4.3. 動詞 |
| 3.2. 介詞 | 4.4. その他 |
| 3.3. 動詞 | 5. 「与」と「及」の主な特徴 |
| 3.4. その他 | 6. おわりに |

キーワード：与(Yu)、及(Ji)、用字法(Uses)、日本書紀(Nihonsyoki or the Chronicle of Japan)、書紀区分論 (the classification theory of Nihonsyoki)

1. はじめに

アン・ヒジョン(2000)では、中国学者の「与」と「及」についての研究を踏まえて、韓日両国の純漢文体といわれる歴史書の『三国史記』と『日本書紀』における「与」と「及」について、古代中国語の分類方法に照らして、区別しがたい介詞用法と連詞用法の区別基準を設け、その基本的な使い分け、即ち「与」と「及」の共通点と相違点、そして誤用例などの諸問題について考察した。

但し、アン・ヒジョン(2000)では、『三国史記』と『日本書紀』における「与」と「及」について、諸用法の中、助辞という見方から介詞と連詞の用法だけを問題になる例を中心に大まかな比較分析を行ったのみである。

* This Research was supported by the Uiduk University Research Grant, 2018

** 威徳大学校 助教授、日本語学

本稿では『日本書紀』だけに絞って「与」と「及」の用字法全般について明らかにしていくつもりである。特に『日本書紀』はその修正過程において巻ごとに中国人の手が入った巻とそれがなかった巻とに分かれているのがよく知られている。それを大抵α群とβ群という用語で分類しているが、本稿では「与」と「及」の用字法においてもそのα群とβ群という「書紀区分論」がどの様に反映しているのかも検討するつもりである。¹⁾

アン・ヒジョン(2000)以前は、「与」と「及」について本格的に比較研究を行った先行研究は皆無である。そこで筆者はアン・ヒジョン(2000)・アン・ヒジョン(2010a)・アン・ヒジョン(2010b)を通じて「与」と「及」を本格的に研究を行った。その他の先行研究についてはアン・ヒジョン(2010a)とアン・ヒジョン(2010b)に詳しく述べているので、参照されたい。

2. 連詞と介詞の区分

「与」と「及」が連詞なのか、介詞なのかという問題は非常に難しく、区別しがたい場合が数多くある。その1例として巻2の神代下には次のような記事がある。

(1)先是、天稚彦与味耜高彦根神友善。²⁾

これについて小学館本³⁾では、「天稚彦(あめわかひこ)味耜高彦根神(あぢすきたかひこねのかみ)と友善(むつま)しかりき。」のように介詞として訓読しているが、大系本⁴⁾では、「天稚彦(あめわかひこ)と味耜高彦根神(あぢすきたかひこねのかみ)と友善(うるは)し。」のように連詞として読んでいる。筆者には後者の方の訓読が正しいと思われる。古代中国語の文

1) 「書紀区分論」については(坂本太郎 外 1967:10-12/森博達 1991:15-17 /高松政雄 1985:131-132)などに言及されており、特に(森博達 1999-2003)に詳しい説明がある。筆者は日本書紀における万葉仮名の使い分けや虚字の使用や用法などにおいて「α群中国人述作説」に疑問があるところも認めざるを得ないが、日本書紀全体を通じてのα群とβ群の区分は明らかであると思われる。特に歌謡と訓注における万葉仮名の使い分けは殆んど納得のいくものである。

2) 本稿での句読点は介詞か連詞かという分析結果とは関係なく、大系本の句読点をそのまま記しておく。以下同じ。そこで特に介詞なのか、連詞なのかの区別において筆者の分析が大系本の訓読点と異なる部分があることを記しておく。

3) 小島憲之 外(1994-1998)『日本書紀1-3』(新編日本古典文学全集2-4 小学館)。以下「小学館本」と略す。

4) 坂本太郎 外(1965-1967)『日本書紀上・下』(日本古典文学大系67-68 岩波書店)。以下「大系本」と略す。

献を見ると、

- (2) 《宋書・蕭惠開傳》：“蕭惠開與汝南周朗同官友善，以偏奇相尚。”
- (3) 《隋書・王胄傳》：“王胄與虞綽齊名，同志友善，於時後進之士咸以二人爲准的。”
- (4) 《明史・王叔英傳》：“叔英與孝孺友善，以道義相切劘。”
- (5) 《漢書・息夫躬傳》：“皇后父特進孔鄉侯傅晏與躬同郡，相友善。”
- (6) 唐元稹《上令狐相公詩啓》：“稹與同門生白居易友善。”

熟語「友善」⁵⁾を持つ「A+与+B」の構造は、その「A・B」はそれぞれ

<蕭惠開>：<周朗> <王胄>：<虞綽> <叔英>：<孝孺>
 <傅晏>：<躬(=息夫躬)> <稹(=元稹)>：<白居易>

のようであり、「A」と「B」は「与」によって密接に結ばれていて、その緊密性は非常に高いのである。その「AとBと」が「仲が良い、親しい」という意味の用法で用いられたのである。ところが、アン・ヒジョン(2000)での「(A)+副詞/動詞/場所など+与+B」の型による介詞の用法以外に、次の例をみると、

- (7) 《舊唐書・元稹傳》：“稹聰警絶人，年少有才名，與太原白居易友善，工爲詩，善狀詠風態物色，當時言詩者稱元白焉。”
- (8) 《晉書・夏侯湛傳》：“湛幼有盛才，文章宏富，善構新詞，而美容觀，與潘嶽友善，每行止同輿接茵，京都謂之‘連璧’。”
- (9) 《三國志・蜀志・諸葛亮傳》“惟博陵崔州平、潁川徐庶無直與亮友善，謂爲信然”

のように「A+文の成分+与+B+用言(この例文では友善)」の型で「A」と「与」の間に文の成分が挟まれている場合は、「Aの方(稹(=元稹)/湛(=夏侯湛)/<崔州平>、<徐庶>)が主体になって、B(<白居易><潘嶽><亮(=諸葛亮)>)とともに用言」という意になるので、連詞ではなく介詞になるのである。

したがって、(1)は、「A」と「与」との間に文の成分がないことと、「A」と「B」とが

5) 友善：親密友好(仲がいい、親しい)。

緊密に結ばれているところから、そして後で述べる「主従関係」でない点から連詞と解釈した方が妥当であると考えられる。

「与」と「及」が連詞なのか、それとも、介詞なのかという問題は、大抵「与」と「及」の位置が主語の位置にある場合だけである。もし主語の位置にある「A」が省略されていれば、それは必ず介詞になり、主語以外の位置では連詞だけになるのである。

それでは主語の位置にある「A+与/及+B」の場合、どういう方法で介詞なのか、連詞なのかを区別するのか。その区別の仕方は、一番目は、前後の文脈によるものである。例えば、「是時、百濟王豊璋、与数人乗船、逃去高麗。(卷27・天智)」は、「百濟王豊璋は、数人と船に乗り」のように「百濟王豊璋」が行動の主になり、「数人」が従になって明らかに介詞である。「故我之陰謀、本無預者。今日之事、唯吾(=淳名川耳尊)与爾(=神八井耳命)自行之耳。(卷4・綏靖)」は、「淳名川耳尊」が兄の「神八井耳命」に「ですから私の秘密の計画はまだ誰にも相談していません。今日のこの事は私とあなただけで決行いたしましょう」と語っており、明らかに連詞である。二番目は、その「B」の後に副詞が来て、そしてその後に動詞が来る場合である。その場合、副詞の例としては例えば「相」「共」「俱」などがある。その中で『日本書紀』では「相」の例が一番多く、その次が「共・俱」の例である。その他に「既・已」の副詞がある。その副詞によって「AがBと相に」・「AがBと共に」・「AがBとすでに」などのように介詞になってその動詞の行為をするという意味になる。三番目の区別の仕方は動詞による。これは後の「及」のところで再度論じることにするが、簡単に述べれば、ある種の動詞が来る場合は介詞ということである。但し、「及」という介詞には、ある種の動詞が来るという制限と言葉を発する類の動詞は使われないという制限があるが、「与」の場合はその制限がない。ただ制限がないだけであって、それが「及」と同じように介詞として使われる時は、「戦う」という意味や「話す(言語の類)」という意味と関係のある動詞が来る。その時は必ず介詞になる。この三つの方法によって介詞なのか連詞なのかを区別するのである。6)

6) 徐萧斧(1981:382)によれば、「与」と「及」が明らかに介詞であると判断できるのは次の四つの場合である。一番目は、副詞が介詞の前に使われている場合である。二番目は、主語が省略されている場合である。つまり、Aの部分省略されている場合である。三番目は、Bの部分(関係詞)が省略されている場合である。前の文のどこかにそのBの部分は現れているが、「与」と「及」のある文章では省略されているのである。四番目は、Bの方(関係詞)が介詞の前にある場合である。例えば、「誰」という表現が「与」の前にある場合である。但し、四つの場合の中、三番と四番の場合は「及」にはない用法である。(显然是介词的位置有四：1.前有状语的，如[诗经，郑风，狡童]“彼狡童兮，不与我言兮”；2.主语省略的，如[又，秦风，无衣]“岂曰无衣，与子同袍”；3.关系位省略的，如[又，郑风，出其东门]“缟衣茹蘂，聊可与娱”；4.关系位在前的，如[又，唐风，葛生]“予美亡此，谁与独处？”但是“及”字从来未见用于后面两种格式。)

ところで、大西克也(1998:141)が述べているように7)、「与」と「及」が連詞なのか、それとも介詞なのかについて、特に副詞がある場合、例えば「共・相・俱」などの副詞と一緒に使われる場合、その副詞は「A+与/及+B+副詞+動詞」のように動詞の前に来るが、その場合これを介詞に見るか、連詞に見るかについて学者によっては異説がある。大西克也のように上下の文脈によってそれを判断するのが一番いい方法であると考えられるが、その文脈を見極めるのも簡単ではないという例がたまたまあるので、非常に難しい。本稿では、副詞を伴う場合は介詞として解釈しておく。但し、「及」の場合は介詞としての例は少ないので、介詞なのか連詞なのかは比較的判断しやすい。

3. 「与」の用法

3.1. 連詞

連詞⁸⁾としての「与」は、429例の中、計239例が見え、55.7%を占める。α群では195例、β群では44例用いられ、圧倒的にα群の方が多い。「与」はたいてい「A+与+B」の構造からなっているが、その「A+B」の成分が「名詞+名詞」になっている例数は175例(76.4%)を数える。そのいくつかの例をあげると、

- (1)次双生億岐洲与佐度洲。(巻1・神代上)
- (2)天皇更益軍衆、悉圉其城。即勅城中曰、急出皇后与皇子。(巻6・垂仁)
- (3)天皇召大山守命/大鷦鷯尊、問之曰、汝等者愛子耶。对言、甚愛也。亦問之、

7) 汉语并列连词和介词的界限有时不够明确，怎样辨别连词和介词，是语法学的一个老难题。…过去有人提出各种巧妙的手段来辨别词性。但并未令人惬意。

8) 周生亚(「并列连词“与、及”用法辨析」『中国语文』 1989第2期)によれば、連詞としての「与」と「及」の用法には六つの違いがある。①「与」の場合は主に名詞、あるいは名詞性の句や文が現われるのに対して、「及」の場合はこれ以外に動詞性の句や文、あるいは主述語の句や文が現われる。②「与」の場合は判断文の述語に使われるが、「及」の場合はそれができない。③「与」と「及」は大抵交替できるが、次の場合は「及」を「与」に交替できない。「及」の前後の「A」と「B」はその例文にあるように主従関係、時間上の先後関係、空間上の遠近関係、そして程度の大小関係などのようにその関係が平等的でない表現に使われるのに対して、「与」は「A」と「B」が完全に平等関係にある表現に使われるので、平等的ではない「及」を平等的な「与」に交替することはできない。④「与」は並列の項目が二つであるのが一般的であるが、「及」はその項目が二つ乃至二つ以上によく使われる。⑤並列項目の場合は、「与」と「及」のその並列項目の内容が同じではないということである。つまり「AとB」ということがある場合は、「AとB」にその内容に差があって「及」だけが四つの用法を持つ。詳しいことは「4.1」で述べることにする。⑥選択比較文の中では「与」は使われるが、「及」は使われない。

長与少孰尤焉。(卷10・応神)

(4)又天皇与億計、曾不蒙遇白髮天皇厚寵殊恩、豈臨宝位。(卷15・顕宗)

(5)夏五月戊申朔甲子、百濟鎮将劉仁願、遣朝散大夫郭務侗等、進表函与獻物。
(卷27・天智)

のようである。次に「是月、蘇將軍与突厥王子契苾加力等、水陸二路、至于高麗城下。(卷27・天智)」のような「名詞+名詞句」が14例、その逆の「典鑰置始多久与菟野大伴、亦坐臈。(卷30・持統)」のような「名詞句+名詞」が9例用いられている。この構文は両方ともα群だけに見えるのが特徴である。「名詞句+名詞句」からなっている構文は、「是月、詔博士高向玄理与釈僧旻、置八省百官。(卷25・孝徳)」のような例が計34例見られる。α群では28例、β群では6例用いられ、α群の方が圧倒的に多く使われている。

「与」の連詞としての用法には、以上以外に古代中国語では、

(6)《史記・魯仲連鄒陽列傳》：“吾與富貴而誦於人，寧貧賤而輕世肆志焉。”

(7)《漢書・藝文志》：“漢興，魯申公爲《詩》訓故，而齊轅固、燕韓生皆爲之傳。或取《春秋》，采雜說，咸非其本義，與不得已，魯最爲近之。”

のように前者の「与其(…より…の方がいい)」と、後者の「如果・假如(もし…ならば)」という仮定表現の用例は1例も使われていないということが特徴の一つである。この他に、「名詞+名詞」の構造であるが、その名詞の前に連体節がくる、つまり連体節が名詞を修飾する例が5例あり、いずれもα群だけに用いられている。

(8)天皇所遣之使、与高麗神子奉遣之使<天皇(すめらみこと)の遣(つかは)す使(つかひ)と、高麗(こま)の神(かみ)の子(こ)の奉遣(まだ)せる使と>、既往短而将来長。(卷25・孝徳)

(9)其長官従者九人、次官従者七人、主典従者五人。若違限外将者、主与所従之人<主(きみ)と従(とも)ならむ人(ひと)と>、並当科罪。(卷25・孝徳)

(10)阿倍臣遣船、喚至兩箇蝦夷、問賊隱所与其船数<賊(あた)の隱所(かくれどころ)と其(そ)の船数(ふなかず)とを問(と)ふ>。(卷26・斉明)

(11)於是、朴市田来津独進而諫曰、避城与敵所在之間<避城と敵(あた)の所在(を)る間(ところ)と>、一夜可行。(卷27・天智)

(12)戊申、日本船師初至者、与大唐船師合戦<日本(やまと)の船師(ふないくさ)の初

(ま)づ至る者(もの)と、大唐の船師と合(あ)ひ戦(たたか)ふ。(巻27・天智)

以上の例がそれである。

連詞のもう一つの特徴は、その名詞あるいは名詞句の内容に76%、つまり171例が人名か神名であるという点である。これ以外は「昔新羅請援於高麗、而攻撃任那与百濟、尚不剋之。(巻19・欽明)・是歳、百濟棄漢城与平壤。(巻19・欽明)」のように国名と地名からなる13例、そして、「此神頭上、生蚕与桑。臍中生五穀。(巻1・神代上)・次有賊一人、直向大使、打頭与手而退。(巻20・敏達)・是以、汝遂有不従者、我与汝有瑕。則国亦乱。(巻23・舒明)・此者常世神也。祭此神者、致富与寿。(巻24・皇極)・凡始畿内、及四方国、当農作月、早務営田。不合使喫美物与酒。(巻25・孝徳)・庚申、天皇遣東宮大皇弟於藤原内大臣家、授大織冠与大臣位。(巻27・天智)・丁未、以務広肆等位、授大唐七人肅慎二人。(巻30・持統)」のように動植物・身体名・代名詞・抽象的なこと・飲食物・冠位・人などからなる41例が見られる。

3.2. 介詞

介詞としての「与」は、声調が上声であり、漢語大詞典の例を引用すれば、

- (1)《詩・邶風・擊鼓》：“執子之手，與子偕老。”
- (2)《禮記・玉藻》：“大夫有所往，必與公士爲賓也。”
- (3)《孟子・離婁上》：“所欲，與之聚之；所惡，勿施。”
- (4)《新制綾襖成感而有詠》：“爭得大裘長萬丈，與君都蓋洛陽城。”
- (5)《戰國策・秦策五》：“<夫差>無禮於宋，遂與勾踐禽，死於干隧。”
- (6)《公羊傳・莊公三十年》：“桓公之與戎狄，驅之爾。” 《金瓶梅詞話》第七三回：“明悟托生與本州……後出家爲僧，取名佛印。”
- (7)《孟子・公孫丑下》：“齊人無以仁義與王言者，豈以仁義爲不美也？”
- (8)《商君書・慎法》：“上舉一與民，民倍主位嚮私交。”

のようである。その意味は「同・跟；以；替；把・將；被；於・在；向；從・由」、つまり、「①～と・共に ②～をもって・～で・～として ③～に代わって・～のために ④～を ⑤(受動文に用い、名詞<動作主>を導く)～に～される・～によって～される ⑥～に・～で ⑦～に向かって・～へ・～に ⑧～から・～より」のように8つの意味を持つ。その中で

是以、与天地之初、君臨之國也。(卷25・孝徳)

は、その訓読の「是(ここ)を以(も)ちて、天地(あめつち)の初(はじめ)より君臨(きみとしらす)國(くに)なり。(小学館本)・是(ここ)を以(も)て、天地の初(はじめ)より、君臨(きみとしらす)國(くに)なり。(大系本)」からも分かるように、「～から、～より」、即ち例(8)の「従・由」の意味として使われている。但し、「君臨(きみとしらす)」のように「与」を「～と」と読むのは正しくないと考えられる。その理由は「与+B」の場合、「与」と「B」の間には文の成分が挟まれることはないためである。そこで「～と」は除いた方がいいだろう。a群の巻25にただ1例が見えるのみである。

この1例を除いて他の114の例はすべて「～と(共に)」の介詞として使われているのである。その例を挙げると、次のようである。

- (1)大鷦鷯尊、与髮長媛既得交慰懃。独对髮長媛歌之曰、(卷10・応神)
- (2)於是、大臣与黒彦皇子/眉輪王、俱被燔死。(卷14・雄略)
- (3)吉備笠臣垂、自首於中大兄曰、吉野古人皇子、与蘇我田口臣川堀等謀反。(卷25・孝徳)
- (4)是時、素戔嗚尊告曰、吾元無惡心。唯欲(=素戔嗚尊)与姉相見、只為暫来耳。(卷1・神代上)
- (5)白髮天皇、聞熹咨歎曰、朕無子也。可以為嗣、与大臣大連、定策禁中。(卷15・顯宗)
- (6)是月、有星、孛于中央。与昴星双而行之。(卷29・天武)
- (7)又高尾張邑、有土蜘蛛。其為人也、身短而手足長。与侏儒相類。(卷3・神武)
- (8)紀小弓宿禰亦収兵、与大伴談連等会。兵復大振、与遣衆戰。(卷14・雄略)
- (9)於是、穴穗部皇子、陰謀王天下之事、而口詐在於殺逆君。遂与物部守屋大連、率兵圍繞磐余池邊。(卷21・用明)
- (10)是日。忌部首首、賜姓曰連。則与弟色弗共悦拜。(卷29・天武)
- (11)其可与吾(=大己貴神)共理天下者、蓋有之乎<其(それ)吾(われ)と共(とも)に天下(あめのした)を理(をさ)むべき者(もの)、蓋(けだ)し有(あり)や>。(卷1・神代上)
- (12)今欲、早知与吾可以礼問答者姓名年位<吾(われ)と礼(みやまひ)を以て問答(とひこた)ふべき者(ひと)の姓名(うちな)年位(としくらゐ)を早(はや)く知(し)らむ>。(卷19・欽明)

以上の例はその構造から見て五つに分けることができる。一番目は、(1)～(3)のように37例

が「A+与+B」という構造であり、典型的な介詞としての用法である。二番目は、(4)～(6)のように37例が「A」の要素はあるが、その要素がすでに前の文、あるいはそれ以前の文に出ていて「B」と一緒に現れていない場合である。三番目は、(7)～(8)のように28例が「Aと与」の間に文章成分が入る場合である。その文章成分は色々あり、ただ副詞だけであるか、もしくは動詞であるか、あるいは文などである。四番目は、三番目と同じであるが、(9)～(10)のように9例が「A」の方が省略されている例であり、二番目と同じである。そして最後に五番目は、(11)～(12)のように2例があるが、それは「与+B+動詞=連体節+A」の型で連体節が「A」を修飾する、「Bと～するA(吾と礼を以て問答ふべき者)」という例である。

以上の例はそれぞれ37例・37例・28例・9例・2例ずつあり、すべてα群とβ群に使われており、その偏りが殆んどない。従って、α群とβ群の区分は意味がない。

その中、次の例は、非常に珍しい例である。

(13)加須利君則以孕婦、嫁与軍君曰、我之孕婦、既当産月。(卷14・雄略)

その理由は、「A+与+B+動詞」という型ではなく、「Cは、Aを以ってBと(に)～させる」言い換えれば「Cは、AをBと(に)～させる」という意味になっている構造であり、「与」の前に動詞がくるケースである。動詞が「与」の前に来るのは非常に珍しい。もちろんこういう表現は現代中国語でも文章では、杨伯峻・何乐士(2001:528)「帝之妻瞬而不告，何也？(孟子・万章上)1.209 意谓帝尧以(娘)嫁与舜。“不告”，不告诉舜的父母。(その意味は、帝の尧は娘を舜に嫁がせた。“不告”は、舜の父母にその事実を知らせなかったことを意味する。)」のようによく見られる。

1例を除いた114の例はすべて「～と(共に)」という介詞として使われているので、「与」という文字は古代日本語では介詞という意味の中で、「～と(共に)」という意味だけに使われていたのは、大きな特徴である。ただし、α群の中に一例だけ「から・より」の用法で使われている例がある。このことは、β群の観点から見ると、「与」の介詞としての用法は「～と(共に)」だけに絞って受け入れたと考えられる。つまり「与」の介詞(連詞も)としての用法は「～と」という日本語の助詞に定着していたらしい。このことは万葉集でも同じ傾向を見ることができる。アン・ヒジョン(2010b)によると、万葉集の歌の中では「与」は計243例見えるが、その中で音仮名として173例、動詞として1例、そして特殊助動詞「こす」の例として15例があるが、「～と」という表記に使われたのは訓読として48例、そして訓仮名とし

て6例がある。訓仮名としての6例を除いた48例は、すべて助詞の「〜と」として使われている。9)

3.3. 動詞

動詞としての「与」は、声調が異なり上声と去声がある。上声の場合は、その意味が20近くあるので、その例を省いて意味だけを挙げることにする。

「1 給予(与える) 2 奨賞(賞品を与え褒めたたえる) 3 交付(交付する・支払う)・償還(返済する) 4 幫助(手助けする・助ける)・援助(援助する・支援する) 5 如同(〜と同じである・〜のようである)・好象(まるで〜のようである) 6 親附(自ら所有する)・陪從(侍從・君主のそばに仕える人) 7 隨著(に従った)・依照(従う・基づく・依拠する) 8 稱贊(褒めたたえる)・贊揚(褒めたたえる・稱賛する) 9 允許(許す・認める・承認する)・許可(許可する) 10 對付(対処する・対応する) 11 當(相当する・匹敵する)・敵(對抗する・抵抗する) 12 使(く〜に>〜させる。) 13 用(用いる・使う) 14 謂(〜呼ぶ・〜と言う)・叫做(〜と称する・〜と呼ぶ・〜と言う) 15 爲(〜である)・是(〜である) 16 制作(製作する・作る・造る) 17 數(数える)・計算(計算する・算定する) 18 等待(待つ・待ち望む) 19 比得上(比べられる・比肩できる・匹敵する)」

この上声の動詞としての「与」は、計38例ある。その中で

- (1) 弟時既失兄鈎。無由訪覓。故別作新鈎与兄。(卷2・神代下)
- (2) 時有從者、取得田道之手纏、与其妻。(卷11・仁徳)
- (3) 時飢者臥道垂。仍問姓名。而不言。皇太子視之与飲食。(卷22・推古)

9) 3-260	榜与雖思	漕かむと思へど	鴨足人
3-443	繼往物与	繼ぎ行くものと	大伴三中
3-443	問幸座与	ま幸くいませと	大伴三中
3-443	名津匠來与	なづさひ來むと	大伴三中
4-642	懸而縁与	懸けて寄せむと	湯原王
4-686	過与	過ぎぬると	坂上郎女(以上訓借字)
1-65	弟日娘与	弟日娘と	長皇子
2-176	天地与	天地と	舍人
3-258	鴛与高部共	鴛鴦とたかべと	鴨足人(以上日本語語順)
3-449	与妹來之	妹と來し	大伴旅人
4-524	与妹不宿者	妹とし寝ねば	藤原麻呂(以上漢文語順)

(‘-’の前の数字は巻数、後ろの数字は歌番号を表す。)

(4)而有勢者、分割水陸、以為私地、売与百姓、年索其価。(巻25・孝徳)

のように「与える(給予)」の意味の「あたふ」として最も多い28例が使われている。「あたふ」は、意味によっては

(5)童女君者本是采女。天皇与一夜而脹。遂生女子。(巻14・雄略)

(6)臣聞、易産腹者、以禪触体、即便懷脹。況与終宵而、妄生疑也。(巻14・雄略)

のように天皇の行為を尊敬するために「あたはず(4例)」というふうを読んだり、または

(7)干時、隼人昼夜哀号陵側。与食不喫。七日而死。(巻15・清寧)

のように「たまふ(1例)」という例もある。これはただ訓読の問題であって、意味としては「与える」の「あたふ」がベースになっている。これらも「あたふ」に数えれば、33例にもなる。そして

(8)饒速日命、本知天神慰懃、唯天孫是与。(巻3・神武)

(9)又詔曰、新羅沙門行心、与皇子大津謀反、朕不忍加法。(巻30・持統)

のように「与する・味方する(4例・幫助；援助)」という例がある。また、意味としては「あたふ」と読んでも構わない例もある。

(10)膳臣聞之、使人探索其調、具為与之。還京復命。(巻19・欽明)

この例は、「為与」を「かへさしめて」と読んでいて、「与」を「かへす」と訓読している。「為(しむ)」は、「三国魏阮籍《詠懷》之三九：“忠為百世榮，義使令名彰。”(為=使)」のように「使」と同じ意味で使われ、もともとは「あたへしめて」と読んでも差し支えない。勿論文脈によって「返す・返還する」という意味の「かへす」と読むのが正しいと認められる。但し、上の例の「使人探索其調、具為(人)与之」の「為」が「使」と同じ用法に使われているので、体系本で「為与」を「かへしあたふ」と読むことには従いがたい。以上のように20近くの意味のある中、日本書紀ではただ二つの意味でしか用いら

れていない。

声調が去声である動詞としての「与」は、その意味は「参与；在其中；干与」、つまり「参与する；その中にある；関与する、かかわり合う」などの意味である。その中で、「然得知之日、和如曾職。其以非与聞、勿防公務。(卷22・推古)」は、「《漢書・淮南厲王傳》：“皇帝不使吏與其間，赦大王，甚厚。”顔師古注：“謂不令吏干豫治其事。”」のように「関与する・与かる(干預)」の意味として用いられ、「然(しか)れども知(し)ること得(う)る日(ひ)には、和(わ)すること曾(むかし)より識(し)れる如(ごと)くにせよ。其(それ)と与(あづかり)聞(き)かずといふを以(も)ちて、公務(こうむ)をな防(さまた)げそと。」のように「あづかる」と読まれている。ただβ群に1例見られる。

3.4. その他

以下、上述の三つの用法以外に使われた用法をまとめて説明することにする。

副詞としての「与」は、計14例ある。その意味は「ともに・いっしょに・同時に・どちらも(皆；全部)」などである。古代中国語での例は、「《易・無妄》：“天下雷行，物與無妄。”王弼注：“與，猶皆也。天下雷行，物皆不可以妄也。”」のようであり、『日本書紀』では

(1)吾勿貪天下。唯懷幼王、從君王者也。豈有距戰耶。願共絶弦捨兵、与連和焉。

(卷9・神功)

(2)今億計天子子、唯有陛下。億兆攸歸、曾無与二。(卷16・武烈)

のようである。それぞれの訓読は、「願(ねが)はくは、共(ともに)に弦(ゆづる)を絶(た)ち兵(つはもの)を捨(す)て、与(ともに)に連和(うるは)しみせむ。；今(いま)し億計(おけのすめらみこと)の子(みこ)は、唯(ただ)陛下(きみ)のみ有(ま)します。億兆(おくてう)の歸(き)する攸(ところ)、曾(かつ)て与(ともに)に二(に)無(な)し。」であり、大系本と小学館本で14例すべて「ともに」と読んでいる。おそらく古代日本漢文でも副詞の「与」は「ともに」の訓読が定着していたと考えられる。α群で8例、β群で6例見られる。

音仮名としての「与」は、計11例あるが、その中で「天吉葛、此云阿摩能与佐叵羅。(卷1・神代上)・一云、与会豆羅。(卷1・神代上)」のように「此云」と「一云」の音仮名として1例ずつあり、その他の9例は「播都制能野麼播、伊底穎智能、与慮斯企夜麼、和斯里底能、与慮斯企夜麼能(卷14・雄略)」のように歌謡の中に現われる。

熟語としての「与」は、10例あり、「億計王惻然歎曰、其自導揚見害、孰与全身免厄地歟。(巻15・顕宗)・下枝懸青和幣、和幣、此云尼枳底。白和幣、相与致其祈禱焉。(巻1・神代上)」のように「孰与」6例、「相与」が4例ずつ、そして「問群臣曰、獵場之樂、使膳夫割鮮。何与自割。(巻14・雄略)・罷市司要路津濟渡子之調賦、給与田地。(巻25・孝徳)」のように「何与」と「給与」が1例ずつ用いられている。「相与」は、β群だけに現われ、他の三つの熟語はα群だけに見える。

助詞としての「与」は、ただ1例見られる。その助詞の用法は、平声を持ち、「《論語・公冶長》：“子曰：‘始吾於人也，聽其言而信其行；今吾於人也，聽其言而觀其行。於予與改是。’”」のように使われ、その意味は「文の中で用いられ一時的な停止を表す(助詞・表句中停頓。)」ということである。その例がβ群の巻22に「率土兆民、以王為主。所任官司、皆是王臣。何敢与公、賦斂百姓。(巻22・推古)」のように見られる。訓読では「ぞ」と読んでいる。

4. 「及」の用法

4.1. 連詞

「及」は計422例ある中で、連詞としての「及」は287例を占めており、そのパーセントは68%に及ぶ。その連詞の形式には次のように8つがある。

- (1)即以其稻種、始殖于天狭田及長田。(巻1・神代上)
- (2)今問朝集使及諸国造等、国司至任、奉所誨不。(巻25・孝徳)
- (3)則遣大伴連馬養、迎於江口。船卅二/艘及鼓/吹/旗幟、皆具整飾。(巻23・舒明)
- (4)以皇后春日山田皇女及天皇妹神前皇女、合葬于是陵。(巻18・安閑)
- (5)於是、分道、遣吉備武彦於越国、令監察其地形嶮易及人民順不。則日本武尊、進入信濃。(巻7・景行)
- (6-1)天皇命大皇弟、宜(大皇弟)増換冠位階名、及氏上/民部/家部等事。(巻27・天智)
- (6-2)又婦女者、無問(婦女者)有夫無夫及長幼、欲進仕者聽矣。(巻29・天武)
- (7)大伴金村大連/物部尾輿大連為大連、及蘇我稻目宿禰大臣為大臣、並如故。(巻19・欽明)

(8)始為族悲、及思哀者、是吾之怯矣。(卷1・神代上)

(1)は「天狭田及長田」のように「名詞＋名詞」になっている。(2)は「朝集使及諸国造等」のように「名詞＋名詞句」になっている。(3)は「船卅二艘及鼓・吹・旗幟」のように「名詞句＋名詞」になっている。(4)は「皇后春日山田皇女及天皇妹神前皇女」のように「名詞句＋名詞句」になっている。(4)には、「(4-1)冬十月、為入宮地、所壞丘墓、及被遷人者く丘墓(はか)を壞(やぶ)られたるひと及(およ)び、遷(うつ)されたる人(ひと)には>、賜物各有差。(卷25・孝徳)」のように「A」と「B」とが連体節を持つ名詞句からなっている場合と、「(4-2)其祭之、以天皇之御船、及穴門直踐立所献之水田く及(およ)び穴門直(あなとのあたひ)踐立(ほむたち)の献れる水田(こなた)>、名大田、是等物為幣也。(卷8・仲哀)」のように「名詞句＋連体節を持つ名詞句」によってなっている場合もある。(5)は「其地形嶮易及人民順不」のように「名詞句＋文」による形式である。(6-1)と(6-2)は「宜(大皇弟)増換冠位階名及氏上・民部・家部等事」・「無問(婦女者)有夫無夫及長幼」のように「文＋名詞」になっている形式である。(7)は「大伴金村大連・物部尾輿大連為大連及蘇我稻目宿禰大臣為大臣」のように「文＋文」になっている。(8)は「悲及思哀」のように「動詞＋動詞」からなっている。

連詞としての「及」のα群とβ群による分析は次の通りである。「名詞＋名詞」は136例あり、β群が112例、α群が24例ある。「名詞＋名詞句」は37例あり、β群は24例、α群は13例である。「名詞句＋名詞」は15例があり、β群が12例、α群が3例あるが、その中にはβ群に連体節を持つ名詞句が2例ある。「名詞句＋名詞句」の場合は、計79例があり、β群の方は39例、α群の方は40例がある。その中で連体節を持つ名詞句だけによってなっている場合は、2例がありβ群に1例、α群に1例、片方だけが連体節を持つ名詞句になっている例は計8例あり、β群が2例、α群が6例ある。次に「名詞句＋文」になっている例はただ1例あり、それはβ群に現れる。「文＋名詞」からなる例は、β群に1例、α群に1例ある。「文＋文」によってなっている例は計16例あり、β群に7例、α群に9例がある。「動詞＋動詞」からなっている例は、ただ1例あり、それはβ群に見られる。

連詞として「及」だけにある用法がある。その用法は基本的に「与」が使われず、使われてもごく制限的であり、その数は非常に少ない。その「及」独特の用法について述べることにする。

(9-1)則皇后詔大臣及中臣烏賊津連/大三輪大友主君/物部胆咋連・大伴武以連

曰、(巻8・仲哀)

(9-2)因以詔之曰、親王以下、至于庶民、諸所服用、金/銀/珠玉、紫/錦/繡/綾
 <諸(もろもろ)の服(き)用(もち)ゐる所(ところ)の、金(こがね)・銀(しろかね)・珠玉(たま)
 ま・紫(むらさき)・錦(にしき)・繡(ぬひもの)・綾(あや)>、及氈褥/冠/帶、并種々雑色
 之類、服用各有差。(巻29・天武)

(9-3)天皇詔皇后及草壁皇子尊/大津皇子/高市皇子/河嶋皇子/忍壁皇子/芝基皇子
 曰、朕今日与汝等俱/盟于庭、而千歳之後、欲無事。(巻29・天武)

(10-1)是日、始説金光明經于宮中及諸寺。(巻29・天武)

(10-2)百濟王臣明、及在安羅諸倭臣等<及(およ)び安羅(あら)に在(はべ)る諸(もろもろ)
 の倭(やまと)の臣等(まへつきみたち)>、任那諸国早岐等奏、以斯羅無道、不畏
 天皇、(巻19・欽明)

(11)一云、二神遂誅邪神及草木石類、皆已平了。(巻2・神代下)

(12-1)於是、其王肖古及王子貴須、亦領軍來會。(巻9・神功)

(12-2)國王及大后、王子等、皆没敵手。(巻14・雄略)

まず一番目は、「A」とか「B」あるいは「AとB」が二つ以上の項目を持つ「多項」
 という用法である。(9-1)から分かるように、その項目が二つ以上の場合である。これには
 (9-2)のように連体節を持つ例もある。そして(9-3)のように多項でありながら主従としても使
 われている例も1例ある。多項の場合は41例あり、β群の方は29例、α群の方は12例あ
 る。その中で連体節を持つ例は4例あり、β群に2例、α群に2例ある。そして多項でも主従
 でも両方使われる場合はβ群だけに1例見られる。

二番目は、「未尽」のことである。「未尽」には(10-1)のように、Bの方に「諸」など
 の文字がある場合である。他に「他」の字がある場合もある。これを「未尽」というが、
 これには(10-2)のように、連体節を持つ例も3例ある。それはすべてα群にだけ現れる。

「未尽」は37例あり、β群の方が18例、α群の方が19例ある。

三番目は、「分類」のことである。分類というのは、「AとB」がその類型によって分類
 されていることを意味する。(11)のようにAの方は神類(前文には「於是、二神、誅諸不順
 鬼神等」とある。)のことであり、Bの方は自然類のものである。これにも連体節を持つ例が
 2例ある。分類は計7例あるが、その中でβ群の方は5例、α群の方は2例ある。連体節の
 方は2例共にα群に現われる。

四番目は、「主従」のことである。Aの方が「主」であり、Bの方が「従」であること

を意味する。例えば(12-1)のようにAの方は「王様」を表し、Bの方は「王子」を表す。そして(12-2)のように、Aの方は「王様」を表し、Bの方は「后とその王子」を表す。こういう主従の用法は5例あり、β群に2例、α群に3例使われている。

周生亚(1989:139-140)によれば、

当“与”“及”作为并列连词，同时出现在同一个词组或句子中的时候，两者有明确的分工：“与”只起单纯的连接作用，而“及”除表示连接外，还往往表示内容上的主从关系等等。如……(2)其左右亦皆随鸣镝而射杀单于头曼，遂尽诛其后母与弟及大臣不听从者。〈史记·匈奴列传〉(「与」と「及」が並列連詞として同じ句や文の中に一緒に現れる時、「与」と「及」は明確な使い分けがある：「与」は単純な連詞の働きをするが、「及」は連詞を表すほか、往々にして内容上の主従関係などを表す。)

のように同じ文章で「与」と「及」が一緒に使われる場合、その時は必ず「与」の場合は単純的な連詞であり、「及」の場合は主従関係を持つ連詞である。その例が「逮捕皇子大津、并捕為皇子大津所誑誤<直広肆八口朝臣音檀・小山下壱伎連博徳、与大舎人中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心、>及帳内砺杵道作等、卅余人。(巻30・持統)」であり、その用法は中国語の用法と同じように、「与」は単純連詞であり、「及」はAの方が「大舎人(おほとねり)」であるのに対してBの方はその下の階級である「帳内(とねり)」を表し、主従関係にある。つまり「及」にある項目の間には「A」の方が「B」よりその地位や階級が上であるという例がα群だけに1例見られる。

4.2. 介詞

「及」の介詞としての用法は次のように11例ある。

- (1)是歳、新羅伐任那。任那附新羅。於是、天皇将討新羅。謀及大臣、詢于群卿。
(巻22・推古)
- (2)皇后南詣紀伊国、会太子於日高。以議及群臣、遂欲攻忍熊王、更遷小竹宮。
(巻9・神功)
- (3)加羅国王己本早岐、及児百久至・阿首至・国沙利・伊羅麻酒・爾汶至等、将其人民、来奔百濟。(巻9・神功)
- (4)今日本府臣及任那国執事、宜来聴勅、同議任那。(巻19・欽明)

- (5)是以、百濟王父子及荒田別・木羅斤資等、共会意流村。(巻9・神功)
- (6)紀小弓宿禰亦収兵、与大伴談連等会。兵復大振、与遺衆戰。是夕、大伴談連及紀岡前来目連、皆力闘而死。(巻14・雄略)
- (7)唯親王以下及群卿、皆居于輕市、而檢校装束鞍馬。(巻29・天武)
- (8)元年春正月癸卯朔丙午、大臣及群卿、共以天皇之璽印、獻於田村皇子。
(巻23・舒明)
- (9)既而天皇謂高市皇子曰、其近江朝、左右大臣、及智謀群臣、共定議。
(巻28・天武)
- (10)時大友皇子及群臣等、共當於橋西、而大成陣。不見其後。(巻28・天武)
- (11)是以、親王諸王及群卿百寮、并天下黎民、共相歡也。(巻29・天武)

(1)は文章成分が「AとB」の間に入っているので明らかに介詞であり、β群に現れる。
 (2)は「議及」を一つの言葉として理解して、小学館本は「ハカラス」、大系本は「ハカル」と訓読しているが、これはAが省略されているので、明確に介詞である。介詞である理由は二つある。一つは「議及」を熟語として訓読しているが、「議及」というのは古代中国語で熟語として使われた例がない。つまり別々の意味を持つ字である。そしてこの(2)は(1)とその構造が同じである。ただ(2)には「以」の文字がないだけであり、(1)の場合は小学館本と大系本ともに「及」を「～に」と読んでいる。つまり文脈的に「～と」ではなく「～に」と読んでいるのであるが、これは介詞として読んでいるのと同じである。(3)と(4)は「及」の介詞としての特徴である動詞の種類による例である。(3)は「来奔」、(4)は「来」である。(5)～(7)は動詞の種類にもよるが、それとともに副詞(共・皆)も一緒に使われているので、明らかに介詞である。(8)から(11)までは動詞の種類によるのではないが、「共」という副詞によって介詞として分類できる。但し、前述したように副詞を介詞として解釈するかしないかとの問題があるので、もしこの(8)～(11)を介詞と認めない場合は、7例の内、β群が5例、α群が2例になる。11例を介詞と見る場合は、β群が9例、α群が2例である。

徐萧斧(1981)によれば、『日本書紀』における「与」と「及」の用法は、特に連詞と介詞という二つの用法だけに絞って述べれば、古代中国の資料の中で『左伝』によく似ている。つまり『左伝』には「与」と「及」両方とも介詞と連詞の用法が現れている。それ以外の古代中国資料では、例えば『論語』のように介詞と連詞の用法が「与」だけにある文献があったり、あるいは『春秋』のように「及」だけに介詞と連詞の用法があった

り、そして『呂氏春秋』や『国策』などでは「及」の場合は介詞の用法がなく、「与」と「及」はその他の用法が全てであるという文献がある。従って、そこで『左伝』の用法だけが日本書紀に似ていると言える。両漢時代以後は「与」と「及」の用法は基本的に第三類、つまり「与」の場合は連詞と介詞に使われるが、「及」の場合は連詞だけに使われるという第三類に統一されている。そこで「及」は介詞としては使われなくなった。そして少なくとも介詞の位置では明らかに介詞の位置ということが分かる場合でも「及」の字は使われなくなったのである(両漢以下, “与、及”的用法基本上统一于第三类, “及”字不再用作介词, 至少不再用于显然是介词的位置。徐萧斧 1981:379)。しかし、日本書紀では両漢時代以前の用法が用いられているのが特徴である。

以上の観点からα群だけに限れば、介詞が2例に過ぎないので、両漢時代以後の「及」の介詞としての用法がなくなったこととほぼ軌を一にすると考えられるが、β群の方は少なくとも5例以上使われているので、依然として旧来の用法を踏襲していることが窺われる。

4.3. 動詞

動詞としての「及」は計422例がある中で118例がある。その比率は28%である。「及」の古代中国語での用法には「①追上・赶上(追う・追い付く) ②至・到達(至る・到達する) ③待・等到(~まで待つ) ④遭受(会う) ⑤兄傳位于弟之称(兄が弟に譲位することを称する) ⑥參與(参与する) ⑦給・給予(与える) ⑧涉及(言及する・及ぼす)・牽連(かかわり合う・引っ掛かる) ⑨比得上(比較できる・比べられる) ⑩來得及(間に合う・遅れない)」のように十通りの意味がある。その中で5つの意味が使われている。その例を見てみると、次のようである。

- (1)屋蓋未及合、豊玉姬自馭大亀、将女弟玉依姬、光海来到。(巻2・神代下)
- (2)由是、随船浪之、遠及于新羅国中。(巻9・神功)
- (3)未及数日、薨于私家。(巻29・天武)
- (4)然或及老、或患病、其永臥狭房、久苦老疾者、進止不便、淨地亦穢。
(巻29・天武)
- (5)是以、今汝御孫尊、悔先皇之不及而慎祭、則汝尊寿命延長、復天下太平矣。
(巻6・垂仁)
- (6)汝等所習之業、何故不就。汝等雖衆、不及辰爾。(巻20・敏達)

(7)適遇于逢坂以破。故号其処曰逢坂也。軍衆走之。及于狭々浪栗林而多斬。

(巻9・神功)

(8)既而率其三婦女、以至津国、及于武庫、而天皇崩之。不及。(巻10・応神)

(9)若君国或臣、不正心者、当受其罪。追悔何及。(巻25・孝徳)

(10)朕嘉厥尊朝愛国、売己顕忠。故賜務大肆、…水田四町。其水田及至曾孫也。

(巻30・持統)

(1)から(4)までは「宋蘇軾《上富丞相書》：“勇冠於天下，而仁及於百世。”康有爲《大同書》戊部第一章：“而欲人種改良，太平可致，猶却行而及前也。”のように「至る」「到達する」という意味として使われたのである。その例は105例ある。β群に63例、α群に42例使われている。(5)と(6)は「《戰國策・齊策一》：“君美甚，徐公何能及君也？”」のように「比較できる」「比べられる」という意味として使われている。その例は3例ある中で、β群に2例、α群に1例見られる。(7)は「《後漢書・虞詡傳》：“虜衆多，吾兵少，徐行則易爲所及，速進則彼所不測。”」のように「追う」「追い付く」という意味として用いられている。その例は3例あるが、3例すべてがβ群だけに使われている。(8)と(9)は「《晉書・石勒載記上》：“敵必震惶，計不及設。所謂‘迅雷不及掩耳。’”元趙孟頫《嶽鄂王墓》詩：“英雄已死嗟何及，天下中分遂不支。”」のように「間に合う」「遅れない」という意味としての用例である。その例は6例あるが、β群に1例、α群に5例あり、α群の方が多い。(10)は「《左傳・僖公二十四年》：“晉侯賞從亡者，介之推不言祿，祿亦弗及。”」のように「与える」という意味としての用例である。その用例は1例しかない。それはα群だけに使われている。以上のように118例の中でその用法はα群に四つの意味としてβ群にも四つの意味として使われているが、共通例を除けば、α群の方は「間に合う・遅れない」と「与える」という意味として使われているのに対して、β群の方はもっぱら「追う・追い付く」という意味として使われていることが特徴である。

動詞として使われた「及」をめぐる118例は、「及」単独で使われた例が81例、「及」以外にいろいろの成分が「及」の前にあたり「及」の後にあたりして使われた例が37例ある。そのことについては表1のようである。

表1

<及>	α群	β群	計
単独	30	51	81
いろいろの成分	19	18	37
計	49	69	118

表2

<及>	α群	β群	計
及于	1	7	8
及於	1	0	1
及乎	1	0	1
及逮于	1	0	1
及到	1	0	1
及至	6	7	13
至及	0	1	1
始～及	4	0	4
自～及	1	2	3
自～及/於	1	0	1
自～及至	1	0	1
自～及至于	1	0	1
自～至及	0	1	1
	19	18	37

表2は、37例で使われているいろいろの成分の分析である。この分析から、α群の方がいろいろの成分、形式を使っていることが分かる。それは「及於」「及乎」「及逮于」「及到」「自～及/於」「自～及至」「自～及至于」などのような形式で1例ずつであるが、すべてα群だけに現れ、β群にはその例がないということが大きな特徴である。これは、β群の方の筆録者は、古代中国文献に対して典型的な形式だけに絞っていた、つまり多様な表現より、ある程度固定化した形式だけを用いたということを示唆していると考えられる。β群だけに使われている例は、「至及」1例と「自～至及」1例だけである。逆に「始～及」の場合はα群だけに4例現われる。

「及」単独といろいろの成分を含んでいる「及」は、その後ろにくる成分は三つに分けることができる。一番目は、名詞である。その名詞はたいてい時間や場所を表す名詞が一番多い。そして人名や地名を表す固有名詞も含んでいる。二番目は、動詞である。ただ動詞だけが使われている場合もあるし、主語と動詞、つまり主語と述語の場合の動詞もある。もう一つは副詞「諸」を使ってそのあとに動詞が来る場合である。三番目は、主語と動詞からなっている構文が連体節をなして、それが「時」という名詞を表す形式である。

4.4. その他

以上の用法以外に次のように、

- (1)廿二年、新羅遣久礼叱/及伐干貢調賦。司賓饗遇礼数減常。及伐干忿恨而罷。
(卷19・欽明)
- (2)新羅、別以及滄弥武為質。以十二人、為才伎者。(卷26・齊明)

固有名詞として3例あるが、それは「及伐干・及滄」のように官位名として使われているのである。3例ともにα群だけに現れる。熟語としては

- (3)爰雄鯽等知免、以急追及于伊勢蔣代野而殺之。(卷11・仁徳)
- (4)不謂、邁疾弥留、至於大漸。此乃人生常分。何足言及。(卷14・雄略)
- (5)每於侍執之際、輒言及政事、多所毘補。(卷30・持統)

のように3例が見られる。α群に2例、β群に1例ある。β群の方は訓読では「おひしく」というふうに読んでいる。そしてα群の2例の場合は「いふ」と読んでいる。但し、大系本では(5)は「輒(すなは)ち言(こと)、政事(まつりごと)に及(およ)びて」のように、「言」を「こと」、「及」を「およぶ」に読んでおり、(4)は熟語として読んでいるように異なる訓読をつけている。

5. 「与」と「及」の主な特徴

「与」と「及」のそれぞれの用法と例数、そしてα群とβ群によるその例数などを表したのが次の表3と4である。

表3

<与>	α群	β群	計	%
連詞	195(81.6%)	44(18.4%)	239	55.7
介詞	54(47.0%)	61(53.0%)	115	26.8
動詞	17(43.6%)	22(56.4%)	39	9.0
熟語	6(60.0%)	4(40.0%)	10	2.3
助詞	0(00.0%)	1(100.0%)	1	0.2

副詞	8(57.1%)	6(42.9%)	14	3.3
音仮名	9(81.8%)	2(18.2%)	11	2.6
計	289(67.4%)	140(32.6%)	429	100.0

表4

<及>	α群	β群	計	%
連詞	90(31.4%)	197(68.6%)	287	68.0
介詞	2(18.2%)	9(81.8%)	11	2.6
動詞	49(41.5%)	69(58.5%)	118	28.0
熟語	2(66.7%)	1(33.3%)	3	0.7
官職名	3(100.0%)	0(00.0%)	3	0.7
計	146(34.6%)	276(65.4%)	422	100.0

「与」と「及」の用法を分析した表をみると、三つの点において大きな特徴がある。

一番目は、介詞のことである。「及」の場合、介詞が11例あるが、その中でβ群が9例、α群が2例である。その中で介詞と見るべきか連詞と見るべきかという問題のある5例を除いても、β群の方は5例、α群の方は2例である。中国の両漢時代以後の「及」の用法は介詞がなくなって介詞の方は「与」の字を使っていたことは前述したが、その観点から見ると、β群の方は9例でも5例でもその用例数が多いのである。それは、β群の筆録者は「及」の介詞としての用法がなくなったということまでは明らかに反映していなかったと言えるのであろう。また「与」の場合、介詞が115例ある中で、β群が61例、α群が54例あるが、30巻に及ぶ日本書紀の中でα群は13巻、β群が17巻という観点からその比率を計算し直すと、115例は、β群が17巻(=57%)なので66例、α群が13巻(=43%)なので49例になる。実際β群は61例、α群は54例であるので、β群に比べα群の比率が5例多い、約4.4%高くなる。これは「与」がα群で介詞の比重が大きくなったということを示唆していると考えられる。

二番目は、連詞の用法の分布である。これには大きな特徴がある。「与」の場合、239例の中でα群の方が195例あり、その比率は81.6%である。それに対して「及」の場合は、287例の中で、β群に197例があり、そのパーセントが68.6%である。「与」がα群に多いのに対して「及」はβ群の方が圧倒的に多い。これは連詞用法の中でα群の筆録者が修正過程において「及」の比重を減らし、「与」の比重を増やしたという可能性を排除できないと考えられる。

三番目は、「与」の場合、音仮名は11例あるが、α群で9例すべてが歌謡だけに使われているのに対して、β群の方は「此云」また「一云」に1例ずつあるだけである(歌謡の

中で「ヨ」の表記としてβ群だけに使われている字には「予」29例、「誉」5例などがある)。歌謡だけを見ると、α群の特徴は大抵画数の多い漢字を使っているのに対して、この「ヨ」の表記だけにおいては逆にβ群の方が画数が多い「誉」を使っているのが特徴である。

最後に、人名や地名または官職名などの固有名詞として「及」の字は3例あるが、「与」の字は1例もない。そこで固有名詞としては「与」が使われていないのが特徴である。これは音仮名として、歌謡だけに使われている「与」に対して「及」は固有名詞として本文だけに用いられているのである。

6. おわりに

本稿は、『日本書紀』における「与」と「及」を分析し、その用字法全般を明らかにしたものである。また「与」と「及」の用字法においても「書紀区分論」がどのように反映しているのかも検討したものである。その結果をまとめると次のようである。

1. 連詞の「与」は429例の中239例で55.7%であり、「及」は422例の中287例で、68%である。
2. 介詞の「与」は115例で、α群の「～から・～より(従・由)」の1例を除いて、すべて「～と(共に)」の意味として使われ、「及」は11例使われている。介詞の「与」は、古代日本語で万葉集でも訓読として48例すべてが助詞の「と」として使われているように、114例すべてが「～と(共に)」として使われているので、「と」という日本語の助詞に定着していたと考えられる。
3. 上声の動詞の「与」は38例あり、「与える(給予)」という意味と関係があるのは33例、「与する・味方する(幫助・援助)」という例が4例ある。去声の動詞の「与」は、「関与する・与かる(干預)」の意味としてβ群に1例ある。動詞の「及」は118例ある中、α群とβ群共に四つの意味として使われており、共通例を除くと、α群は「間に合う・遅れない」と「与える」の意味に、β群は「追う・追い付く」の意味専用に使われている。
4. 「与」は、副詞として14例あり、「ともに」の訓読として定着していたらしい。音仮名

- 11例、熟語10例、語気詞4例、助詞はただ1例見られる。「及」は、固有名詞として3例あり、ともに官位名でα群だけに現れ、熟語も3例見られる。
5. 「与」は音仮名として歌謡だけに用いられているが、「及」は固有名詞として本文だけに用いられている。
6. 連詞の場合、「与」はα群に圧倒的に多いが、「及」はβ群に相当多い。恐らくα群の筆録者が修正過程において「及」の比重を減らし、「与」の比重を増やした可能性が窺われる。
7. α群の筆録者は多様な表現を使っているのに対して、β群のは固定化した典型的な表現に留まっていることなどからも「書紀区分論」が支持されると考えられる。つまり、連体節を持つ名詞からなる連詞の「与」はα群だけに4例見られる、同じ文章に「与」と「及」が一緒に用いられた1例はα群にある、動詞の「及」の場合、α群には「及於」「及乎」「及逮于」「及到」「自～及/於」「自～及至」「自～及至于」などのように多様な表現が見られるが、β群には「及于」「及至」のような典型的な表現しか使われていない。¹⁰⁾また、連詞と介詞の「与」と「及」の用法は、古代中国の資料で『左伝』と同じ傾向を見せる。

【参考文献】

- 安熙貞(2000) 「「与」と「及」の用字法の比較研究 - 『日本書紀』と『三国史記』を中心に-」 『福岡大学大学院論集』32-2 福岡大学大学院論集刊行委員会 pp.1-17.
- 안희정(2005) 「어조사 ‘于’와 ‘於’에 대한 비교 연구 - 『日本書紀』를 중심으로-」 『日本語文學』第26輯 韓國日本語文學會 pp.127-149.
- _____(2010a) 「万葉集의 與·及 표기자 수용과정 연구 -韓·日·中 비교에 의한 새로운 연구 방법론 모색을 위하여-」 『日本文化學報』第44輯 韓國日本文化學會 pp.207-231.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.21481/jbunka..44.201002.207>)
- _____(2010b) 「万葉集의 歌謡 속의 与·及字 研究 -韓·日·中 자료의 비교분석을 통하여-」 『日本文化學報』第47輯 韓國日本文化學會 pp.61-81.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.21481/jbunka..47.201011.61>)

10) アン・ヒジョン(2005)にもこの結論と全く同じ結果を得ていた。つまり、古代中国語の助辞「於」と「于」の日本書紀における用法を検討した結果、古代中国語で「於」に「発生範囲(在～方面、在～中)・発生原因(因為、由于)・協同施行方面(跟、同)」などの新しい用法が現れるが、その用例数は、β群(5例)：α群(28例)のようにα群に圧倒的に多いこと、「於」と「于」の用例数・項目の数・項目の比率などにおいて「於」はα群に、「于」はβ群に多数を占めていることなどによって、α群は古代中国語の「於」と「于」の用法の変遷過程をよく反映しているのに対して、β群はそれをあまり反映していない擬古的な漢文体であると結論づけた。

- 小島憲之 外(1994-1998)『日本書紀1-3(新編日本古典文学全集2-4)』小学館
坂本太郎 外(1967)『日本古典文学大系 日本書紀上』岩波書店 pp.10-12.
_____ (1965-1967)『日本書紀上・下(日本古典文学大系67-68)』岩波書店
高松政雄(1985)『日本漢字音概論』)風間書房 pp.131-132.
森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店 pp.15-17.
_____ (1999)『日本書紀の謎を解く—述作者は誰か—』中央公論新社
_____ (2003)「日本書紀成立論小結—併せて万葉仮名のアクセント優先例を論ず—」『国語学』第
54巻3号 国語学会
大西克也(1998)「并列连词“及”“与”在出土文献中的分布及上古汉语方言语法」『古汉语语法论集』
语文出版社 pp.130-144.
罗竹风主编(2007)『汉语大词典 CD-ROM』汉语大词典出版社
徐萧斧(1981)「古汉语中的“与”和“及”」『中国语文』第5期 pp.374-383.
杨伯峻·何乐士(2001)『古汉语语法及其发展(下)』语文出版社 p.528.
周生亚(1989)「并列连词“与、及”用法辨析」『中国语文』第2期 pp.137-142.

논문 투고 일자 : 2019. 10. 13

논문 심사 일자 : 2019. 11. 03

게재 확정 일자 : 2019. 11. 06

 <要旨>

日本書紀「与」と「及」の用字法研究

安熙貞

本稿は、『日本書紀』における「与」と「及」を分析し、その用字法全般を明らかにしたものである。また「与」と「及」の用字法においても「書紀区分論」がどの様に反映しているのかも検討したものである。その結果は以下の通りである。

1. 連詞の「与」は429例の中239例で55.7%であり、「及」は422例の中287例で68%である。
2. 介詞の「与」は115例で、「及」は11例使われている。介詞の「与」は、114例すべてが「～と(共に)」として使われているので、「と」という日本語の助詞に定着していたと考えられる。
3. 上声の動詞の「与」は38例あり、去声の動詞の「与」はβ群に1例ある。動詞の「及」は118例ある。
4. 「与」は、副詞として14例あり、「ともに」の訓読として定着していたらしい。音仮名11例、熟語10例、語気詞4例、助詞はただ1例ある。「及」は、固有名詞として3例あり、ともに官位名でα群だけに現れ、熟語も3例ある。
5. 連詞の場合、「与」はα群に圧倒的に多いが、「及」はβ群に相当多い。恐らくα群の筆録者が修正過程において「及」の比重を減らし、「与」の比重を増やした可能性が窺われる。
6. α群の筆録者は多様な表現を使っているのに対して、β群のは固定化した典型的な表現に留まっていることなどからも「書紀区分論」が支持されると考えられる。また、連詞と介詞の「与」と「及」の用法は、古代中国の資料で『左伝』と同じ傾向を見せる。

A Study on the Use of “Yu(与)” and “Ji(及)” in the *Nihonshyoki*

Ahn, Hee-Jung

This paper analyzes “Yu(与)” and “Ji(及)” in the “*Nihonshyoki* (The Chronicle of Japan)”, and clarifies their general usage. In addition, it examines how the classification theory of *Nihonshyoki* is reflected in the use of “Yu” and “Ji”. The results are summarized as follows:

1. The conjunction “Yu” appears in 239(55.7%) of 429 cases, while “Ji” appears in 287(68%) of 422 cases.
2. The preposition “Yu” is used in 115 cases, while “Ji” is used in 11 cases. All 114 examples in the “*Nihonshyoki*” are used as “to(tomoni)”. We believe that “Yu” was established as the Japanese particle “to” in Old Japanese.
3. There are 38 appearances of the verb “Yu” with the rising tone, while the verb “Yu” with the departing tone has a single appearance in the β group. There are 118 cases of the verb “Ji”.
4. The adverb “Yu” has 14 appearances, and it seems that it was well established as a kun reading of “tomoni(both)” in the “*Nihonshyoki*”. “Yu” has 11 “on” readings or phonograms, 10 idioms, 4 modal particles, and only 1 particle. There are 3 proper noun uses of “Ji”, appearing only in the α group, and there are also 3 idiomatic uses of “Ji”.
5. In the case of conjunctions, “Yu” is predominant in the α group, but “Ji” appears more in the β group. There is a possibility that the scribes of the α group have reduced the frequency of “Ji” and increased the frequency of “Yu” during the correction process.
6. The scribes of the α group used a variety of expressions, whereas the ones of the β group used fixed and typical expressions. This further substantiates the “classification theory of *Nihonshyoki*”.